

シンポジウムⅡ

当事者が語る私自身の学びの創造性

一場・人・もの のデザインを通して『自分』を発見し創造する

司会・企画者：塘 利枝子（同志社女子大学現代社会学部 現代こども学科教授）



子ども学研究において、大人が子どもを分析し評価するだけでなく、子ども自身が自分を語る事が重要である。しかし子ども自身が学術集会のような公の場で公のことは使って語るためには、様々な準備が必要となる。そこで本シンポジウムでは、「子ども」時代に最も近く、「子ども」と「大人」の間にいる青年期の人々に語ってもらうことで、当事者の学びの軌跡を捉えようとした。西谷はセクシャルマイノリティーの教師・保育者の面接調査をもとに、幼少期からLGBTQの子どもの「性の自己肯定感」を高める支援が重要であり、それが「性以外の自己肯定感」を高めることにも繋がると分析した。また彼らへの面接調査を通して、マイノリティーがマジョリティーに合わせる事が子どもの幸せにつながるのではなく、子どもの多様性を認めるとともに、自分が将来小学校教師になる上で、教師の多様性をも模索するようになったと述べた。

谷は、ベトナムルーツの女子青年への面接調査の結果と、自分自身のベトナムルーツへの意識の変化について発表した。面接調査の分析の結果、ベトナム語の上達度やベトナム人としての他者からの肯定的な評価が、ベトナム人としてのアイデンティティに影響を与える可能性が示唆された。また自分自身のベトナムルーツへのアイデンティティの意識化と形成については、周囲との関係性の中で醸成されている点が紹介された。

西本は、保育者の絵本の読み聞かせへの子どもの集中力には、視覚だけではなく聴覚的な要素も重要であること、子ども自身の体幹の程度も集中力に関わっているなど、子どもの視点に立った「場」のデザインについて述べた。

西垣は、絵本の内容が子どもの発達段階を踏まえて作成されていること、さらに小学校の教科書にも分析の範囲を広げて発表した。特に小学校の道徳の教科書に

描かれた援助行動における自己の葛藤に関する教材内容と、子どもの自己認知の発達との関係性について述べ、子どもの発達段階に合わせた教材（もの）の重要性を指摘した。

以上4人の青年期の語りを通して、自分を発見し創造するための場・人・ものを周囲の大人はどのように設定したらよいかについて、フロアの参加者と議論が行われた。いくつかの議論の中で、子どもの視点に立つことと足場づくりの重要性を企画者自身が再認識した点がある。それは谷が、「子ども」時代に自分の「ベトナムルーツ」を家庭内で否定的に評価されたことに対して、その場から「逃げる」という手段を用いながら、その後大学教育の中で肯定的に評価されたことを助けにして、自分自身のアイデンティティを構築しようとしている旨が、フロアの質疑応答を通して浮かび上がってきた点である。大人にとっては「逃げる」という行為は否定的に捉えられるが、子どもにとっては時として自分を壊さないための重要な手段となる。例えば虐待を受けている子どもにとって「逃げる」という手段は、力や立場の弱い子どもが自分を守り肯定するための大事な方略である。谷の発言は、子どもの声の代理者であり、「子ども」時代に最も近い青年期ならではの語りであった。さらに大事なことは当事者が「逃げた」後の受け入れ先であり、教育の場で彼らを支え再構築する機会を与えることの重要性が示唆された。

子ども学研究において子どもの視点から「当事者」の語りを聴くことの必要性が本シンポジウムによって再確認されたと思われる。そして、当事者が抱いた違和感や希望を大切にしながら自身の学びの物語を生きるには、原因と結果を性急に結びつけず、相対化する契機として、問いの立て方や省察の視点を変えるなどの支援も必要になっていくだろう。

話題提供者

西谷柚香（同志社女子大学現代社会学部現代こども学科4年次生）

谷 梨紗（同志社女子大学現代社会学部現代こども学科4年次生）

西本奈穂（同志社女子大学現代社会学部現代こども学科4年次生）

西垣侑花（同志社女子大学現代社会学部現代こども学科4年次生）

コメンテーター

吉永紀子（同志社女子大学現代社会学部 現代こども学科准教授）

